【報告】第41回パラリンピック研究会 ワークショップ 「北京2022パラリンピック冬季競技大会 日本代表選手団報告会」

1．プログラム

2022年４月12日（火）オンライン開催

10：00～ 10：20	報告１　「北京2022パラリンピック冬季競技大会日本代表選手団報告」 河合純一（北京パラリンピック日本代表選手団　団長）
10：20～ 10：40	報告２　「北京2022パラリンピック冬季競技大会結果報告」 大日方邦子（アルペンスキーチーム　リーダー）
10：40～ 11：40	討議 モデレーター：渡正（順天堂大学　准教授） 指定討論者：桜間裕子（北京パラリンピック日本代表選手団　副団長）

2．要旨（報告１・報告２）

（報告１）北京2022パラリンピック冬季競技大会日本代表選手団報告

河合純一

北京2022パラリンピック冬季競技大会は，2022年３月４日から13日までの10日間に亘り，北京市，延慶区，そして河北省の張家口で開催された。本大会の大きな特徴の一つは，選手村が３カ所にわかれていたことだった。参加国は46カ国で，実施競技はアルペンスキー，クロスカントリースキー，バイアスロン，スノーボード，車いすカーリング，パラアイスホッケーの６競技（日本からは４競技に出場），参加選手数は558人（IPC サイト５月11日現在）であった。

日本代表選手団は，コロナ禍の影響により，メダル数といった明確な指標を設けず，選手たちが安心・安全な形で大会に参加し，最高のパフォーマンスを発揮できることを目指した。また，感染症対策を徹底して，陽性者を出さないということも心がけた。そして，東京パラリンピックの盛り上がりを継続させることも重要視した。

日本代表選手団は，選手29人に，コーチ・スタッフ，役員等を加えて総勢73人であっ

た。選手の年齢は10代から40代までと幅広く，性別は男性約７割，女性約３割という構成であった。選手の出場回数をみると，初出場，二度目の選手が全体の約５割を占め，最多出場選手は７度目の出場を果たしたクロスカントリーの新田佳浩選手であった。障がい種別では，視覚障がいのある選手の参加率が非常に低く，今後の課題といえる。

メダル獲得数をみると，主将を務めたアルペンスキーの村岡桃佳選手が金メダルを３個，旗手を務めたクロスカントリースキーの川除大輝選手も金メダル１個を獲得し，日本代表選手団は，合計で金４銀１銅２の７個のメダルを獲得した。前回の平昌大会と比較するとメダル数全体では，３個減らしたものの，金メダル数をみると自国開催の長野大会を除けば過去最多であった。また，入賞者数も前回の平昌大会と比較し約２倍となったため，日本選手団全体の競技力の底上げは一定程度できたと考えている。

本大会においては，２月24日のロシアによるウクライナ侵攻を受け，ロシアとベラルーシの選手の出場が禁止される事態となった。開会式で，国際パラリンピック委員会（IPC）のアンドリュー・パーソンズ会長が「Peace」と力強く叫んだことが，この事態を象徴している。こうした状況を受け，パラリンピックが戦争で負傷した兵士のリハビリに端を発しているという経緯を改めて振り返り，正にパラリンピアンやパラリンピック関係者こそが平和についても発信できる存在ではないかと強く感じた。また，日本パラリンピック委員会（JPC）は，大会期間中の３月８日の国際女性デーに合わせ，女性の活躍についてSNSで発信するとともに，約15カ国の各国パラリンピック委員会との交流を図った。

開催国である中国の活躍も特筆すべき点であった。前回の平昌大会では，カーリングで金メダルを一つ獲得するにとどまった中国だったが，今大会では最終的に金18個を含めて61個のメダルを獲得し，夏季大会のみならず冬季においてもメダル獲得数のトップに躍り出た。中国が活躍した要因は主に三つあると考える。一つ目は，夏季競技から冬季競技への転向など，有望なアスリートを選抜する仕組みおよび競技に専念できる環境の整備。二つ目は，既存のパラスポーツ専用ナショナルトレーニングセンターへのアイススケートリンクの設置，クロスカントリーをトレーニングできる施設の整備など，年間を通じて冬季競技のトレーニングができる環境の整備。三つ目は，海外強豪国のコーチの招聘である。

今後の日本の取り組みとしては，J-STARプロジェクト等を通じ，改めて選手の発掘・育成に力を注がなければならない。また，今回出場できなかったアイスホッケーとカーリングの強化，村岡選手のような夏冬両方に出場することの奨励も行うべきだと考えている。この先は，JPSA（日本パラスポーツ協会）『2030年ビジョン』および『JPC戦略計画』，スポーツ庁『第３期スポーツ基本計画』『持続可能な国際競技力向上プラン』に

基づいて，競技団体やJSC，JOCと協力しながら取り組んで行きたい。

（報告２）北京2022パラリンピック冬季競技大会結果報告

大日方邦子

北京大会中の役割について

大会期間中にアルペンスキーチームリーダーとして選手とともにコースに入り指導も行ったが，大部分はゴールエリアで選手たちを迎え入れ，メディア取材を見守っていた。また，JPCと日本障害者スキー連盟のつなぎ役として，期間中に発生するさまざまな問題に即時対応する役割も担っていた。

日本代表選手団の成績について

７個のメダルを獲得し，34件の入賞を果たすことができ，基本的にはよい成績を残すことができたと言えるだろう。前回の平昌大会と比較すると，メダル数はやや減少したものの入賞者数は大幅に増えた。また，東京大会と北京大会の間は半年ほどしかなかったにもかかわらず，両大会に出場した選手が選手団に４人もいたことは一つのポイントと言える。

平昌大会から北京大会への強化活動について

アルペンスキーでは，コロナ禍においても強化拠点である長野県の菅平高原パインビークスキー場をフル活用することができた。また，選手の個々の特徴に合わせたチェアスキーの開発も行った。ノルディックスキーでは，走力強化および日常的なトレーニングが継続できる環境を作った。バイアスロンでは負荷射撃の強化を行い，スノーボードは，国内のトレーニング施設を活用し，高度な技術を要するコースの造成等を行った。

アルペンスキーについて

コロナ禍による影響としては，２度にわたる世界選手権延期により北京大会の出場資格取得に影響が及んだ。また，ワールドカップの中止や日程変更が相次ぎ，プラン通りに強化計画を実行することができなかったため，同時に複数のプランを立てて臨機応変に対応した。選手がレース感覚をなかなか掴めない，コロナ禍の影響により約１年に亘り競技用具を使えないといったケースも起きた。対策としては，ヨーロッパでの長期間にわたる合宿や，帰国時の２週間隔離下でも練習を継続できる環境整備等を行った。さ

らに，IPC 公認大会を北京大会直前の２月に日本国内で開催し，選手たちが国際ポイントを取得して出場資格を得られるように配慮した。

北京大会ならではの難しさとしては，コースに関する事前情報が一切なかったことが挙げられる。スキー場へのアクセス情報も少なく，コースについても変化が多くアイシーな急斜面が多かったため，短時間での柔軟な対応が求められた。

一方で，中国選手は男女三つずつのカテゴリーのうち，あわせて５つでメダルを獲得した。なかでも若い選手の活躍や，片腕に障がいのあるガイドと共に出場した視覚障がいのある選手の活躍が印象に残っている。また，中国選手はフランスのテシエ社製のチェアスキーを使用していた。以前は日本の NISSIN 社製のチェアスキーが主流であったが，今大会では約７割の選手がテシエ社製を使用していた。

日本チェアスキーチームは長い間トップに君臨してきたが，現在ではトップオブトップという状況ではなくなりつつある。女性選手については，村岡桃佳選手が圧倒的な技術力，メンタルの強さ，短時間でのコースの見極めという意味で非常に優れていた。

出場選手の傾向としては，全般的に女性選手の出場が少ないことが挙げられる。それに加え，男女ともにそもそも視覚障がいの選手の割合が少なく，また，座位カテゴリーの，特に高速系の種目においては女性選手の出場が少ないため，これらの状況を冷静に分析していく必要がある。

ミラノ・コルチナ2026大会に向けた課題としては，まずチェアスキーや義足，シットスキー競技用具の開発とそれを使いこなす準備が求められる。また，次世代選手の発掘と育成に関し，特に10代の選手においては学業との両立が重要である。社会人については，アスリート雇用といった形で競技に専念できる環境を整備するとともに，その後のキャリアを自分自身で考える必要がある。さらに，ベテラン選手から次世代の選手への継承も重要だろう。それに加え，女子選手ならびに視覚障がい選手の発掘や育成においても非常に大きな課題が残されている。

３．総合討論

（渡）ここからは，桜間さん，河合さん，大日方さんと共にパラリンピックについて考えていきます。初めに，副団長を務められた桜間さんから簡単にコメントをいただいた後に討論に移っていきます。

（桜間）今回，日本代表選手団副団長を務めさせていただきました。このお話をお受けする際に，私に求められていることは何かを深く考えました。とにかく日本代表選手団

が安全に競技に臨めるということを第一に考えて，団長，副団長そして競技団体，選手の間を取り持つ「潤滑油」という役割を担おうと決めて臨んだ大会でした。選手村に入村してから，１週間ほどで開会式を迎えましたが，その１週間は，本部スタッフの業務を理解するために，担当者と行動を共にし，それぞれの業務に関与して，円滑に進められるよう私が引き受けられる部分を引き受けることに充てました。また，とにかく選手，コーチと同じフィールドで応援することを心がけ，その際に選手やコーチといろいろな話をする中で，逆に選手から競技のことを教えてもらい，しっかりと応援をすることにも力を注げたと思います。私自身の特徴を活かしたトピックスとしては，３月８日の国際女性デーに合わせ，JPC 女性スポーツ委員会としてこの記念日を祝うアクションを起こしました。河合団長，井田副団長に相談，ご協力いただき実現に至りましたが，JPC 女性スポーツ委員会がこうしたアクションを起こすことには意義があったと思っています。選手やコーチにも協力してもらい，日本から女性スポーツ委員会のメンバーからも写真を送ってもらい，それを動画にして JPC の SNS から発信しました。これが日本の某テレビ局のニュースで「バズった」として取り上げられたこともあり，日本にはなじみの薄い国際女性デーが皆さんの意識の中に浸透をしたのではないかと思っています。期間中はコロナ絡みでは本当にたくさんの業務がありましたが，大きな怪我もなく無事に乗り切り，大会を終えられて今はほっとしているところです。今日はよろしくお願します。

（渡）副団長という立場を超えて様々な業務を把握されていた立場からも議論に参加していただければと思います。まず，これは私のかなり個人的な印象ですが，東京大会に比べてテレビ放送は激減し，NHK の中継も少ない印象を受けました。そのため，メディア全体のパラリンピックに対する注目度が下がったと感じました。皆さんは北京にいらしたので，国内のメディア状況はあまりご存知ないと思いますが，北京にいる期間中，あるいは事前，事後でパラリンピックの注目度について，どのように感じたのかを教えていただけますか。またそれは，冬季大会であること，または自国開催ではないこと，つまり北京で行われていたことがどの程度影響しているのかも，併せて教えていただけますか。まずは団長の河合さんからお願いします。

（河合）大会期間中，日本にいたわけではないですし，東京大会でも選手村にいたので，どれぐらい報道されていたのかは数字でしか把握していないのですが，単純に，北京大会は６競技で78のメダルイベントがあった一方，東京大会では22競技539のメダルイベントがありました。そのため，東京大会では NHK を中心とした放送時間が560時間程

度になったのだと思います。今回，北京大会の放送時間が70時間程度, 80時間いかなかったように記憶していますが，１メダルイベントに対して約１時間の放送時間と考えれば，両大会ともに概ねそのような数字になってはいるので，その考え方は成立しているのではないでしょうか。放送する内容があっての放送時間でもあるので，大会規模も違いますし，選手数も約4,400人と約560人の違いがあり，そうした前提も含めてしっかりと議論をする必要性があり，それぞれの人が感じている印象以外の面でも考えていく必要があります。

（渡）そうですね。大会の規模に対してどの程度の注目度，放送時間があったのかという視点は必要ですし，今後そういった分析は出てくると思います。河合さん，東京大会の盛り上がりの継続を目指されていたと先ほど報告されていましたが，それに関してはいかがだったでしょうか。

（河合）残念ながらロシアのウクライナ侵攻という，大会に水を差す出来事がありました。けれども，北京オリンピックの選手の活躍をしっかりと継続しながら，海外で開催されたパラリンピックにおいては史上最多の金メダル数を獲得したというような形で報道をしていただいたことを通じて，東京大会の盛り上がりを継続する役割を選手たちは十分に果たせたと感じています。

（渡）大日方さん，今の河合さんの話も踏まえて注目度や放送時間については，どのように感じられましたか。

（大日方）河合さんの意見に私も完全に同意します。その上で，事前も含め，大会期間中に，ウクライナへの侵攻とタイミングが重なったことで，当初予定したよりも中継の時間がかなり縮小されてしまいました。NHK の方から聞いたのですが，いわゆるサブチャンネルで中継をしていてもメインチャンネルの方でウクライナ侵攻のニュースをやっていると，ほぼ気づかれないというようなことも起きていたそうです。タイミングという意味では，影響を受けた部分はあったと思います。もう一つはメディアの方たちにとっては選手の活躍，競技はもちろんですが，周辺の情報を取材していくことで，様々な厚みのある放送，あるいは報道が可能になるわけですが，こうした周辺に関する取材がコロナによりかなり大きな制約を受けた事実があります。ご承知の通り，北京大会は「クローズド・ループ」でしたのでメディア自体が，北京パラリンピックをどのように感じているか街頭インタビューを行うこともなかなか難しかったと思います。そう

した周辺の取材もできなかったですし，また事前に国内で練習を公開する等も競技団体なりにはやってはいましたが，感染症対策もあり，なかなか自由に取材をしていただくことはできませんでした。海外遠征にメディアが同行する予定もありましたが，そういったことができなかったことで，大きな影響は受けただろうと思います。一方，気になるのはNHKが放送権を持っているところです。NHKが非常に手厚くやっている一方，民放の皆さんが，取材をすることも今大会では難しかったですし，放送権がそもそもないということで，NHKを見ない，あるいはテレビを見ない方々からは「テレビではパラリンピックを全然やっていなかったよね」という声も聞きました。そのため，これは民放で放送されないからだと感じた次第です。メディアが多様化していますのでテレビだけが全てではないとはいえ，いろいろな形で発信していくことの大切さも強く感じました。

（渡）お話を伺って，コロナ禍でなかなか周辺取材ができなかったということの大きさ，あるいはメディアが細かい取材ができないというところの影響があったことに気づかされました。放送権の問題も考えなければいけませんし，メディアの多様化をどう考えていくのかは今後の課題かと思います。そうした中で，先ほど桜間さんは国際女性デーにおける取り組みに触れられましたが，日本代表選手団の情報発信について教えていただけますか。

（桜間）私自身，2008年の夏季の北京大会と2010年の冬季のバンクーバー大会に，日本代表選手団の総務スタッフとして参加をしましたが，その当時と比べて本当に大きな差を感じたのが，報道関係者の多さでした。今回の北京冬季大会では，東京大会と比べると，日本での開催ではないということで減ったかと思いますが，昔と比べて今，どうしてこんなにも報道関係者が多いのか，渡航に困難を極める状況の中でなぜ現地まで来て報道するのかについて，広報の担当者と一緒に行動しながらわかったことが何点かありました。JPCから積極的に選手の一言コメントを発信したり，開催期間の途中でもそれぞれの選手村のメディアセンターで記者会見を開いたりと，積極的に情報提供をしていたんです。そのための準備として，広報チームが常頻繁に会議，打ち合わせをして，どうやって対応しようかと考えている姿を目の当たりにし，こういう努力があって，新聞，それから，テレビ，ウェブニュース等でたくさん報道をしていただけたのだということがわかりました。今日もメディア関係者が大勢参加してくださっていますが，派遣元，主催者からの情報が提供されるのとされないのでは大きな違いがあります。そういったところで，JPCの広報の担当者が，寝る間を惜しんで連絡・調整をしたりといった努力

をしているのを本部で見ることができましたので，これか，と思いました。また，今回特徴的だと感じたのは，昔はよく新聞社でも社会部とか教養，暮らし・福祉といった部署の方々が取材に来られていましたが，北京冬季大会では運動部やスポーツ部の方々が来られていて，オリンピックと同じように，パラリンピックもスポーツの枠で報道されていたというのが印象的で，嬉しい変化だなと思った次第です。

（渡）今後は，アスリート，競技団体がいろいろな情報発信をしていく中で，視聴者側がそれをどう受け取るか，受けとめ方に送り手の意図とのずれが生じたり，一致したりをどのように測っていくかが非常に大きな課題となり，考えていくことになるのかなと感じました。別の質問に移ります。河合さんは報告の中で，アスリートのジェンダーバランスに触れられていました。昨今やはりジェンダーバランスの問題は，大きな関心を呼ぶわけですが，本大会の日本代表選手団の役員のジェンダーバランスはどのようになっていましたか。

（河合）ざっとですが，29名選手がいて，役員の数を含めて73名ということなので役員が44名ですよね。割合的に言うと選手の割合と同じ７対３ぐらいには落ち着いていたので，適切だったかなと思っています。スノーボードは，女性の選手はいませんでしたが，女性のスタッフは入っていました。そういった取り組みがなされていたのも，非常によかったのではないかと思います。これ以外にも例えばハイパフォーマンスサポート事業として選手のサポートに関わっている日本スポーツ振興センター（JSC）の皆さんは当然，男性と女性とそれぞれいましたので，昔のように男性ばかりということはなかったと思います。

（渡）ジェンダーバランスの問題について，現在桜間さんは順天堂大学の女性スポーツ研究センターに勤務されていますが，その観点からはいかがでしょうか。

（桜間）今河合さんが説明されたように，日本選手団スタッフの男女比率を調べたのですが，パラリンピックでは女性が27.3％，男性72.7％でした。これがオリンピックになると，女性が17.4％，男性が82.5％という割合でした。パラリンピックの方が10％ほど女性の割合が高いということで，役員・スタッフでも女性の参加が進んでいるといえます。副団長を決めるときにも JPC の幹部は，ジェンダーバランスを考えて私に打診されていましたし，常にジェンダーバランスを念頭に置かれていることが，この数値につながっているのではないかなと思います。

（渡）ただ，ジェンダーバランスというのは一つの指標であってそこに女性がいれば全てOKというわけではないと思います。また，パラリンピックでは，このジェンダーの問題と障がいの問題，あるいは冬季競技であることが重なり合って生まれる困難があると思います。大日方さんは，女性，障がい当事者，冬季競技の選手でもあった立場から，今回，様々なところで感じた困難，または可能性があれば，ぜひ教えてください。

（大日方）北京大会は私にとっては７回目の選手団への参加でした。そのうち５回は選手として，１回は団長として，そして今回初めて競技団体の役員，コーチ・指導者として参加しました。そのため，今回は非常に新鮮でした。過去６大会を振り返り，全大会に共通する部分としては，パラリンピックの冬季大会はスケジュールが非常に過密であるという点，そして冬季競技はアウトドアで天候，それから自然環境の影響が大きく，非常に厳しいという点です。そういった状況での過密スケジュールですので，選手時代も正直影響はありました。さらに，女子は人数が少ないので，今回もありましたが，コースが荒れていないから男女で種目実施日を入れ替えるというようなことが起き，より安定したところを男性に回されてしまうといったことが起きます。また，役員として参加してみると，力仕事があるため体力がある健常者の男性がスタッフにいることが前提となってしまうと思いました。例えばゴンドラを三つ乗り継いで競技会場まで行くのですが，その際，わずかと言えばわずかですが，両腕にチェアスキーを二つ抱えたり，スキーの板を30セット持って100メートルを往復することを求められるのがスタッフです。私や夏目監督は車椅子ユーザーですので，その部分をお手伝いすることができません。そうすると他のスタッフにどうしてもしわ寄せがいってしまう，この部分をどのように解決するのかについては，正直きれいごとだけでは済まない難しさがありました。その一方で，私たち元選手が参加することによって，一緒にコース下見に入ってチェアスキーならではのライン取りや，選手と一緒に動くことで，選手の目線でもう少しここのサポートを改善していこうとか，女子選手はこういうところが気になるから，ここはこうしようというようなことについて，スタッフあるいは選手団と日常的にコミュニケーションを取ることができ，サポートを手厚くすることができたという点では良かったと感じています。

（渡）こうして話を伺うと，アスリートだけではなく，役員，サポートスタッフにも，いわゆるスポーツが持っている，男性で健常者であることが当たり前，あるいはそれを前提にしたようなサポートの仕組みが見えてきました。この点に関して桜間さん，全業務を把握された観点から何か感じたことはありますか。

（桜間）本部のスタッフに関しては，女性と男性では女性の方が多かったぐらいでした。それぞれ得意な分野で業務を全うしており本当にうまく機能していたと思います。他のところでも申し上げていますが，女性であること，アスリートであること，障がい者であること，さらに冬季競技であることは，本当にマイノリティの掛け合わせで，選ばれた人しかいないような場ではあったと思います。そういう状況の中で，今回アルペンスキーチームのヘッドコーチは石井沙織さんという女性でした。石井さんとは以前から面識がありましたので，出発前に成田空港で挨拶した際に「何か，女性アスリート特有の問題等で困ることがあれば，私に言ってください。JPC 女性スポーツ委員会にはたくさんの専門家がいますのでバックアップします」とお伝えしまして，力になれればと思ってはいたのですが，大会期間中を通して，女性特有の問題に関しての相談はありませんでした。後日，大日方さんから，女性がヘッドコーチをやっていたおかげで，また，大日方さん自身，女性であり，元パラアスリートであり，さらに競技団体（連盟）の強化本部長という立場でいらしたため，ヘッドコーチと共に，女性特有の問題にも配慮して，競技団体の中で何か問題があったときに言えるような環境を整えられていたと伺い，すごく嬉しい気持ちになりました。そういった点で，やはり女性アスリートのことを理解できる存在がチームの中にいる，ということは重要ではないかと今も強く感じています。

（渡）おそらく，そうした障がい，ジェンダー，あるいは冬季競技等の要素が重なることから生じる困難を考えていくことはパラリンピックだからこそできることですし，そこから日本のスポーツを変えていくことができることもあるかと思います。この点に関して河合さん，JPC の委員長として，あるいは北京大会の日本代表選手団団長としてできたこと，これからやるべき課題にはどういったものがあるでしょうか。

（河合）まず我々としては副団長として桜間さんに入っていただくことで，しっかりとそういう姿勢を競技団体，引いては社会に示していくことは十二分にできたと思います。また，競技団体の動向をみると，常日頃，女性スポーツ委員会等を通じて伝えているメッセージもご理解いただいているのではないかと思います。こういった中で東京大会もそうですが，選手のアクセシビリティ，バリアフリーは非常に改善されましたし，見る面でも，観客席にある車椅子席のサイトラインの確保であるとか，会場の最寄り駅からのアクセシビリティであるとか，そうした点は随分やったのですが，実は支える側のスタッフ，ボランティア，あるいは審判，競技役員，こういった側にも，障がいのある方々，そして男性も女性もいて，彼ら彼女らによって当たり前に支えられていく仕組

みをどれだけ多くの関係者が，スポーツ関係者になりますが，意識してデザインしているのかというと大きな疑問です。障がいがあることによって，私も全盲ですから，雪国にそのまま放置されたら凍死してしまうかもしれません。そういう意味で，常に誰か一緒に歩く人が必要になりますので，そういった際のサポートが必要な場合，アクレディテーションカードの枚数をどうやって増やせるのか，これは全体で見ると開催側の負担や費用にも関わるので一概には言えませんが，そういったことをIPCに伝えていくことは検討しなければならないなと思っているところです。

（渡）支える側の環境あるいは多様性の問題というのはなかなか表に出てこなかった部分ですので，今お三方から話をお伺いできて非常に有意義だったと思います。最後に，冬季競技に知的障がい者の参加が認められていないということ，また今回視覚障がい者の参加が，日本選手団は少なかったということについて，河合さん何か一言あればお願いします。

（河合）知的障がい者は1998年長野大会では参加があったものの，2000年シドニー大会のスペインの知的障がいバスケットボールチームの不正によって，参加ができない時期が続きました。ロンドン大会から水泳，陸上，卓球と３競技は夏季で認められているものの，冬の競技はまだ認められていないという状況です。そういった中で今後どうしていくのかは，競技団体に話していただくのがいいと思います。視覚障がいについても，出場が難しい中で，他の国を見ても思ったのですが，いわゆる全盲のＢ１クラスとその他のＢ２，Ｂ３とある中，活躍するのはほぼＢ２，Ｂ３の選手です。そうした中で，重度障がいの選手たちに，どうやってウインタースポーツを広めていくか，ハイパフォーマンスなウインタースポーツをどうやって追求していくかという課題は，おそらく日本だけでなく世界中が抱えている大きな課題なのだろうと思います。強豪国の関係者と話をしたときに，常にガイドとなる人を２人は専従で確保すべきだというアドバイスをもらいました。それだけの人材を確保し，本人も含めた３人分の人件費や遠征費を確保するというのは今の日本でどこまでできるのかという問題も含めて，大きな課題，宿題ではないかと思います。

（渡）知的障がい者，重度の障がい者あるいは視覚障がい者の参加に対して競技団体としての取り組みがもしあれば教えていただけますか。

（大日方）日本障害者スキー連盟では，知的障がいの方も一緒に一つの団体で活動して

います。パラリンピックの競技団体の中で，パラリンピックを目指す選手と国際知的障害者スポーツ連盟（Virtus）の国際大会を目指す知的障がいの選手が，一つの競技団体のもとで活動しているというのは我々だけだと認識しています。これは最近のことではなく長野大会からです。長野大会が終わった後から脈々と受け継がれているものです。我々にとって，知的障がいの選手と一緒にスキー場で競技を楽しむこと，競い合うことは極めて自然なことで，2030年に札幌でパラリンピックを開催することができれば，その時には知的障がいの選手もまた一緒に長野大会の頃のように参加できることを願っています。JPC からの支援を受けているジャパンパラアルペンスキー競技大会では，知的障がいの選手と一緒に，一つのコース，一つのレースの中で競技運営できており何も問題ありません。知的障がいの選手の競技力は非常に高いので，これらをしっかりと続けていくこと，そしてさらに国際的にも一緒にやることのメリット，そういったことを競技団体からも訴えていきたいと考えています。もう一点，重度の障がいの方に関しては河合さんのご指摘の通りで，Ｂ１の選手がコースを滑り切ることは難しく，今回も非常に難度の高いコースでした。今，私の背景にも北京大会のコースを写していますが，すり鉢状で，雪質も非常に難しい，スピードも出る，このコースを滑り切るのはいわゆるハイサポートニーズの選手にとっては難しかったと思います。Ｂ１の選手，それから座位の中でも障がいの重い LW10-１クラスの選手たちにとって滑りきることは難しい。もう一つは女性選手です。これは先ほどの健常者男性の話につながりますが，ほとんどのコースは，立って滑る人あるいは立位の男性を主とした男子選手の力量にフォーカスしたレイアウトではないかと思います。パラリンピックでは男女同じコースを使い，スタート位置を男女で変えるということもありませんでした。そういう意味では，かなり難度の高いコースであれば，女性は振り落とされてしまうこともあるという点も指摘させていただきます。

（渡）こうした知的障がいあるいは重度の障がいのある方の参加は，スポーツイベントとしての魅力をどう発信していくかという点と相まってなかなか難しい。難しいという言い方はよくないかもしれませんが，考えなければいけない点がまだあることがよくわかりました。先ほど大日方さんは報告の中でキャリアの問題について言及されていました。ここにいるお三方は，アスリートとして活躍された経験もありますが，その後，転身されています。現役のパラリンピアンや，若手の発掘も含めて障がいのあるアスリートたちのキャリアの問題をどう考えていけばいいか，手短にコメントをいただけますか。

（桜間）オリンピック選手も同じかもしれませんが，競技を懸命にやっていると，いろいろなことを経験する機会が少なくなるのかなと感じています。アスリートを引退したときに，さてどうしようと考える方が多い印象があります。そこは男女問わずになりますが，新しい知識を習得するとか，社会でいろいろな職に就けるような技術を身に付けるといった教育が必要ではないかと思っています。私は大学にいますので，大学院に進学されるオリンピアン，パラリンピアンが最近増えてきていると強く感じています。大学院で２年間勉強されて成長して，まるで別人かのような自信をつけて，修了されていくという姿を見ています。そういったことがアスリート自身のキャリアの形成に役立てられるので，教育は本当に大事だなという印象を持っています。

（河合）キャリアは難しい問題ではありますが，デュアルで考えていくことがまず大切だと思います。アスリートとしてのキャリアと人としてのキャリアは別ではありませんし，できる限り中長期で考えられるとなおいいなと思います。短期的に目の前の４年後のパラリンピックをどうするのかという視点だけでなく，常にいろいろなことを想定できるようになるといいですね。ですから，JPC としても，キャリアに関するいろいろな研修もやっていますが，アスリートの教育は，より力を入れてこれからやっていかなければなりません。これは昨年発表した JPC の戦略計画にもしっかりと位置づけていますので，アスリート委員会，あるいは女性スポーツ委員会，様々なところと連携して進めていきます。今回改めて北京大会で強く感じたことは，ロシアの問題に絡み，政治とスポーツ，アスリートを切り離せるのか非常に悩みました。我々としても大会直前の選手たちを守りながら，そして集中できる状況をどうやって作れるのかすごく悩んだわけです。そこで改めて，社会があってスポーツが成り立つという思いに至ったわけですが，平和があってこそ，我々はスポーツができる環境があるのだということを認識しながら今回のような問題を考えるプログラムを今後検討しなければならないと強く感じました。JPC のアスリート委員会委員長の三阪さんに，帰国後すぐ相談し，私の感じた課題は共有していますので，そういったところも活かして，すぐに解決できる問題ではありませんが，地道にそして着実に取り組んでいきたいと考えています。

（渡）社会があってその中にスポーツがあるという話は，実は私も大学で学生に向けて話していますが，若い世代には気づきづらいというか，その辺の難しさを感じています。河合さんから JPC としても活動していくという力強い言葉を頂いて，日本のスポーツ界にも希望があると感じました。この辺りは大日方さんはいかがでしょうか。

（大日方）これについては二つのことを申し上げたいと思います。少し厳しい言い方になるかもしれませんが，ベテランの選手にとっては，競技経験が長くなれば長くなるほど，どのタイミングで辞めるのか，選手としてのキャリアにピリオドを打ち，次のステップに進むのが難しくなると痛感しています。このことが何をもたらすかというと，河合さんの報告にもありましたが選手の年齢層が非常に厚くなる。これはもう少しじっくり見ないといけませんが，年齢が高くてもトップオブトップでいられる人はもちろんいいのですが，個々の選手を見ていると実はじりじりと競技力が下がっている傾向があり，それに危機感を覚えています。これまで通りでは競技力というのは上がらず，むしろじりじりと下がっていく。それに対して競技団体としてサポートできる部分は何なのか，あるいは，もしかしたらオリンピックであれば，競技層が厚いので，次世代を育てやすい環境があるかもしれませんが，競技団体の中でもサポートできるアスリート数は決まっていますので，ベテランの選手たちをサポートしながら，同時に次世代選手を継続して育てていくことの難しさを今回改めて感じました。北京大会後はどのようにやっていくのかというところも，選手自身がキャリアについてしっかり考えていくことの大切さとともに，競技団体としてどこに重きを置いて評価をしていくのかという考え方も含めて，きれいごとだけではなかなかすまない部分があるように感じました。もう一点は，年齢の若い選手たちの発掘と育成です。今回中国の10代の選手が活躍をしていました。他国においても，10代の選手が珍しくない状況の中で，それを日本で仮にやった場合，大学や大学院より前の中学校，高校といった年代での，基本的な教育の保証は絶対に必要だと感じました。冬季の大会においては海外遠征も非常に多い。そういう中で，例えば学校の授業もしっかりと受け，勉強もしつつ競技もして，そして日常の生活もできる環境というもの，いわゆるアカデミーをつくる。そこではしっかりと語学も勉強でき，ロジカルな分析ができる数学的な要素も身につけることができ，社会でもしっかりと働ける役に立つ人材が輩出できる。そうした場所を大きく制度設計をする，そういうものが必要なのではないかというのが北京大会から得ることができたと思っています。

（渡）アスリートのキャリアの問題，特に働くことへの道が困難な場合が多い障がいのある人たちのキャリアはしっかり考えていかなければならないと思います。また，障がい者のうち週１回スポーツをする人が３割と言われている中で，どう若手の選手を発掘していくかという問題には，どのようにトップスポーツからグラスルーツへの好循環を生み出していけるかが関わっているため，困難な道のりですし，少しずつの改善しか望めないものだと感じました。ここで参加をしている皆様からの質問に移ります。

（質問１）中国の新しいクロスカントリースキーとアルペンスキーの強化施設について，もう少し詳しく教えてください。クロカン用の室内人工雪コースができたということでしょうか。あるいは，アルペンは人工芝の施設を作ったということでしょうか。

（河合）これは聞いた話なのですが，2019年に北欧やドイツにもあるクロスカントリーのスノードーム的な施設，つまり室内で年中滑れるところを整備したと聞いています。春夏秋にそうした施設を使いながら，この間は当然海外にもコロナ禍で行けなかったと思いますので，冬のシーズンは今回会場になったところを拠点に活動したと聞いています。また，私が滞在していたのがクロカン，バイアスロン側の村だったこともあり，アルペンの具体的な情報は入手できませんでした。

（質問２）冬季パラリンピックに知的障がい者が出場していませんが，今後の動向として，IPC の動きについてわかる範囲で教えてください。また，厳しい意見ですが，冬季パラリンピックに強いロシアやベラルーシが参加していなかったことを考慮すると，いい成績だったとは言えないのではないでしょうか。

（河合）先日パーソンズ会長からも，知的障がいの競技種目を充実させていくという方向性が発表されたところです。これは夏季または冬季に限定しているものではありません。トータルで考えて，そういった方向性を検討しているということだと思いますので，我々としてもしっかりとコミュニケーションをとって伝えるべきことを伝えて，やっていく。札幌の招致に向けて，オリパラ一体で国としても動き出そうというタイミングかと思いますので，我々としてできることは取り組んでいかなければならないと感じています。二つ目の成績の評価に関してですが，同じようにロシアがドーピング問題で出場できなかったリオ大会の際にもあった話で，今回仮にロシアが出場していれば，メダルの順位では確かに差が少し出たかもしれませんが，そのこと以上に，今回コロナ禍でどうやりきるか，さらにはその中で，金メダルを国外の大会では最多の数を取ることができた。入賞者数を増やしたことも含めて，我々としては好成績だと思っています。今後，ミラノ大会，そして次の2030年に向けて冬季競技をどうするかを含め，まさにこれをまた一つのベースにしながら，今後のロードマップ，ベンチマークをつくっていくのが，我々が責任を持ってやっていくことと思っています。

（大日方）ロシアやベラルーシ，両方の国が参加するはずだった種目についての影響は冷静に見る必要があると思っています。特にクロスカントリーです。バイアスロンとク

ロスカントリーについては平時であれば両国の選手の参加が一定程度ありましたので，クラスごとで細かく見ると，この種目の，このメダルは本来であれば何色だったというところは正直あるのではないかと感じています。ただ，それが全てではなく限定的なもので，例えば村岡選手に関して言うと同じクラスの中に，そもそもロシアやベラルーシの選手がいない状況ですので，それだけが全てではないというところは細かく見ていく必要があるだろうと感じています。

（質問３）河合団長に伺います。ウクライナ選手団の活躍と，ロシアやベラルーシ選手団の不在は，国際社会のあり方がスポーツにも深い影響を与える証左となりました。その是非をどうお感じですか。

（河合）その通りであると感じました。これほどまでに国際情勢に影響を受けた大会は初めてでした。スポーツは社会が平和であってこそ成り立つことを強く感じました。戦争で傷ついた兵士たちのリハビリを起源とするパラリンピックだからこそ，平和や人命，人権尊重を強く発信していかなければならないと感じました。JPC としても具体的な取り組みを検討していきたいと思います。

（渡）質問してくださった皆様ありがとうございました。では最後にお１人ずつ言い足りないこと，伝えたいことがあればお願いします。

（桜間）これからのアスリートは何を発信していくべきかについて，私からお伝えしたいことがあります。今回，日本から応援団が一切行けない状況の中で，無観客で開催されましたが，スポーツは国境を越えるということを痛感しましたし，同じルールのもとで競い合うことは本当に素晴らしいことだと思いました。私も競技をやってきましたが，今回見る側にまわり，アスリートが真剣に競技に臨む姿を見て感動し，30年ぶりに涙が出ました。果敢に攻めて，転倒してしまい最後はゴールできず，決してメダルにつながるものではなかったのですが，その選手のレースを見て，心が揺さぶられ，何か語りかけてくるものがあり，今でも思い出すと鳥肌が立ちます。現在はコロナ禍で，難しいところもありますが，現地で生で見る，そういう世の中になって欲しいですし，感動や課題を共有する，共感することがパラスポーツが発展していく機会になると思います。東京で夏季大会が行われたときに，街角でインタビューを受けた年配の男性が，「障がい者スポーツって今までなんか見ちゃいけないと思っていたんだけど，スポーツなんですね」と言っていたことを思い出しました。実際に現地にいらしてスポーツの良さを

知っていただき，さらにその魅力に引き込まれていただきたいなと思います。私はとにかく心を揺さぶられ，感動して涙したぐらい，冬季のスポーツの素晴らしさに魅了されました。ありがとうございました。

（大日方）私からは二つお話したいと思います。一つ目はアスリートが発信できるということです。今回ロシア，ウクライナ，ベラルーシという三つの国の関係者が，出場できるできない，あるいは戦禍の中で参加するというような状況で，選手もメディアにコメントを求められることも多く，選手自身も自分自身どう考えているのだろうというのを必死に自問自答したと思います。その中で，やはり印象に残ったのは，評論家的に見るのではなく，ロシアの選手，自分が一緒に滑っている日常的にやりとりをしている選手は何を考えているのだろうかと寄り添うこと，ことの是非はともかくとして，国ではなく，この選手はどういうふうにこの事態を受けとめているのかというようなことを友達として思いやる。あるいはウクライナの選手はどうしているか，彼らの家族はどうなのだろうというようなことを選手自身が自分のこととして，あるいはすごく身近なところにいる同じ場に立つ人間として，感じたことを発信できることは大きな強みかなと思いました。頭でっかちになるのではなく自分自身の経験の中から発信をしていく。平和なくしてはスポーツもできないということを伝えることで，非常に説得力のある言葉が発せられるのではないかということを感じました。二つ目は，冬季競技の魅力であるとともに難しさでもある用具を使った競技環境，この用具開発との関係についてです。用具の開発は行き着くところまでいっているのではないかという私自身の個人的な見解もあり，大手の非常に開発力のあるメーカーが，特定の選手に対し供与をしていくことが結果的に何をもたらすのか，そこから先，目指す世界は一体どういう世界なのだろうかということです。これについてはまた別の機会に，もう少し掘り下げて議論することができたらと思っていますし，供与を受けている選手，あるいは開発している企業としての取り組み姿勢についても，ぜひ私自身も伺ってみたいと思った次第です。ありがとうございました。

（河合）私自身は夏の競技出身でしたので，冬の大会で初めて選手団にも入り，応援等に参加したのですが，雪上系に限ると自然の難しさとそれとの付き合い方，さらには日頃から鍛錬している心と身体，さらに，今言った用具，この三位一体の素晴らしさ，そのパフォーマンスが魅力だと強く感じました。今回は氷上系には残念ながら出場できませんでしたが，こういった競技をメダル数でみると，実は雪上系が97％，氷上系は３％です。そういった中で今後我々はどう考えていくかというときに，いわゆる定量的な視

点と，定性的な実感を伴った部分をしっかりと意識しながら，この方向性をつないでいかなければなりません。JPC の委員長という立場からは，当然強化本部と連携をしつつ，どう進めていくのかということになります。もう一方で，国として向かっている障がいのあるなしを超えて誰もがスポーツを楽しめる状況，共生社会と呼ばれるところだと思いますが，それを実現するためにパラリンピックがどう貢献できるかという視点も持ちつつ，これからの様々な活動に，夏冬を団長として経験したからこそ生かしていかなければならない責任を負ったと改めて思っています。本日はこのような報告の機会をいただきましてありがとうございました。

（渡）実は私から皆さんに投げかけたいと思っていた質問がもう少し残っていたのですが，時間の関係上，私の進行の不手際でお聞きできませんでした。例えば，先ほど大日方さんが触れられたテクノロジーとスポーツの問題というのは非常に大きなトピックだと個人的にも感じていますので，別の機会で議論できることを楽しみにしたいと思います。また，河合さんがおっしゃっていた社会あってのスポーツであり，アスリートとしてのキャリアと人としてのキャリアというものを分けずに考えていく必要があることや，コロナやウクライナ危機の中で，アスリートに自らの意見を発信していくことが求められるのか，あるいはどのようにアスリートを教育していくのかという問題は，これからのスポーツ，特にパラリンピックの非常に大きな課題でもありますし可能性でもあると感じています。また札幌招致についてはいろいろな課題があったり，そこには可能性があったり，いろいろな立場で議論ができる環境というものも今後どんどん必要になってくると感じました。今日登壇された皆さんが非常に冷静に，パラスポーツ，パラリンピックの今後やその可能性，課題についてしっかり考えられているなということを強く感じ，心強く思っています。これまで私は仕事柄パラリンピックそのものに対して，わりと批判的な立場で論文を書くことも多かったのですが，そうしたことについてもしっかりと皆さんの経験の中から考えられていて，パラリンピック，パラスポーツの可能性と課題をしっかりと捉えられているというふうに感じて，非常に希望が持てるというか，今後が楽しみな話が伺えたと思っています。今後もダイバーシティとインクルージョンを，パラリンピックを通してどう実現していくかということに貢献できればと思っています。拙い司会でしたが，皆さんのお考えを伺えて非常に楽しかったです。ありがとうございました。